

## 林語堂と費孝通の「老いの文明論」

西 上 勝

### 1. 「貴庚多少？」からの発見

「東洋の生活と西洋の生活とを比較対照しようと努めてきたが、年齢に対する東洋人の考え方を除けば、絶対的な差異は認められない。だが年齢に対する考え方の差異は、はっきり截然と違って、仲裁の余地がない。性、女性、仕事、遊戯や成功などに対する我々の態度における差異はすべて相対的なものだ。中国の夫妻関係は、西欧のそれと本質的に異なるわけではないし、親子の関係ですらそうだ。個人的自由や民主主義に対する考え方、あるいは人民と統治者の関係でも、結局はさほど相違のあるものではない。しかし年齢に対する我々中国人の態度に限っては違いは絶対的で、東洋と西洋とは全く正反対なのである。人の年齢を尋ねたり、自分の年齢を告げたりする場合の様子を見ると、この点が極めてはっきりあらわれている。中国では、公の訪問で、相手の姓名を尋ねた後で続ける質問は、『おいくつになられますか？』である。相手がすまなそうに23歳とか、28歳ですとか返答すると、尋ねた方はたいてい、まだまだ輝かしい将来がおありだし、いつかは老人になれますから、などと言って相手を慰める。またもし、人が35歳とか38歳とか答えれば、もう一方はすかさず深い尊敬をもって、『おめでとうございます』と感嘆まじりに言う。感嘆は相手が高齢になればなるほど大きくなり、どんな人でも50を越えれば、尋ねた方は直ちに謙遜と尊敬の意を込めて声を落とす。」

「我々には人に会うといつも口にする紋切り言葉があるが、その中の一つが『おいくつになられましたか？』である。これはもともと時候の挨拶というもので、深い意味あいはない。しかしこうした意を経ない言い回しは偶然のものなのであろうか。そうではない。我々の社会においては個人の対人行為は常に長幼の順に従って実行されている。私の経験に即して言えば、私よりも年長の人そばにいるとき、彼が腰掛けようとしないと、私は坐っているのが窮屈で、自然と立ち上がってしまう。道を歩くときも、年長者が前で、年下の者が後だ。人にお世辞を言うときは決まってこの人は老成しておられるという。長いひげは、徳が高く人望厚いことの印だ。我々の社会の構造には、どんなものにも尊卑の区分があり、年齢は尊卑の基準なのである。この基本的原則に照らせば、私が学院長夫人に向かって彼女の名前を口にできなかった理由が分かる。呼称は我々の間では人の相対的な地位を規定する符号なのである。年長者に対し

てはうやうやしく『老伯』と呼ばなくてはならない。目上の者だけが目下の者の名前を口にできる。目下が名前で見上の者を呼べば、社会の構成原則に違反することになり、いやおうなしに反感を生んでしまう。」

上に引いた二つの記事は、日常的なあいさつことばからは、中国の社会には人を長幼の順によって序列付ける習慣が確固として存在していることが窺え、その習慣の存在が他の文化圏の社会と中国の社会を決定的に異なるものになっている、と主張する点で全く相同である。しかしながらこの二つの記事は、実はほとんど何の関連もなく、全く異なる文脈で別個の書き手によって書き記されたものなのである。

前者は、エッセイスト・林語堂（1895-1976）が英文によって著し、1937年にアメリカで公開した中国文明批評の書『The Importance of Living』、その中の一節である<sup>1</sup>。

一方後者は、現在では中国を代表する社会人類学者として知られる費孝通（1910- ）の訪米随感録の一部である。費は文化交流使節団の一員として、ハーヴァード、コロンビア、シカゴなどのアメリカの大学を、1943年から1年余りにわたって訪問した。その時、彼の国内での勤務先であった雲南大学の学生たちが運営していた学園紙『生活導報』に、訪問先から書き送られたコラムが元になり、翌々年に一書にまとめられ上海で『初訪美国』として公開された<sup>2</sup>。上に引いた記事は、その書の一部であった<sup>3</sup>。

林語堂と費孝通の二人は、今日から見ればすでに十分古風な中国語のあいさつ言葉「おいくつになられますか？」<sup>4</sup>から、中国で行われてきた人間関係把握の習慣、さらにはそれを必要不可欠な習慣としてきた文化的な仕組みの一端が見て取れると主張する。このあいさつ言葉は、単に話し相手の年齢を明らかにすることが意図された発話などではなくて、そこからお互いが安定して会話を持続することができるようになる意思疎通の基盤を構築しようとする行為なのだ、と彼らは言うのである。

さらに驚くべきことなのだが、こうした習慣が存在しないアメリカの社会に対する違和感を、自らが体験した実例を挙げつつ記録している点でも、二人は同じである。

林語堂の挙げる例は次のようなものだ。

「以前、ある老婦人が何人か孫ができたと言ってから、『いやな思いをしたのは、最初の孫ができておばあちゃんになった時でした (It was the first one that hurt)』と言ったのを聞いたことがある。アメリカ人が年寄りと思われるのを嫌うことは百も承知でいながら、こんな言い方をされるとは全く思いもよらなかった。」<sup>5</sup>

費孝通の方は、次のような経験を書き留めている。

「ユーモアを解する老人なら、東方のしきたりを心得ていて、時には私が意を経ずに示した『不敬』を気に入ってもらえることもあった。私は、ハーヴァードでElton Mayo教授に会った。彼の長いパイプは、私に田舎の老人たちが帯びていたのんびりと落ち着いた雰囲気を感じさせた。後に、私は別の友人に宛てた手紙に、『マイヨー先生の微笑みは私には馴染みのものだ。中国の老人そっくりなのだから』と書いた。ほどなくして、私はマイヨー教授から短い手紙を受け取った。そこには、『私は、あなた方の絵画に見られる老人の智慧ある表情が好きだ。私とその国の人からそうした老人の一人に数えられて、本当にうれしい。』とあった。

わざわざ手紙を書いて謝意を述べるほど喜ぶ人もいれば、口もきけず、顔が真っ赤になるくらい不愉快に思う人もいる、これはどちらもアメリカ人が年について過敏であることの証だ。いい年をした老婦人が、白粉をつけ口紅を引き、なまめかしく娘のように装い、腰はもう一抱えもあるのに、ハイヒールを履き、人が若くてきれいと言うのを聞いては、笑い転げる。男性でも白髪にして紅顔、大いにはしゃいで、他人が『余が心の楽しみをしら』ざることを少しも気にかけず、いつも『閑を偷んで少年をまねる』。これは一体全体どうしたことなのか。子どもと同じように名前を呼びあい、世代の隔てをしないのは、我々からみれば、あまりにひどい。ここでは東西の文化の違いはこの上なくはっきりとしている。」<sup>6</sup>

アメリカの老人たちが老いを厭い、自らの若さを他者に印象づけようと懸命に振る舞うのが、どうしても受け入れ難いものであることを、林語堂と費孝通の二人はこのように告白していた。このように類似の経験を経ていながら、二人の中国とアメリカとの彼我の間に存在する差異をめぐってその後展開された思考は、以下に見ていくように、全く異なった様相を呈することになった。そもそも、林語堂の上に引いた言説は、中国人の日常生活とその知られざる魅力をアメリカ人に向けて紹介することを意図して書き下ろされた著書の一部であったが、費孝通の通信は、中国の知識人に向けて同時代アメリカの中国社会との差異を克明に伝えようと試みた旅行記にあったものだった。つまり、一方はアメリカに代表される近代社会が見過ぎてきた、もう一つの人間の生き方が持つ価値を顕彰しようとするものであるのに対して、もう一方は同時代中国の伝統社会が、どのような点で近代社会と異なるかを浮き彫りすべく試みられた言説なのである。この二つの言説は、発見の内容を同じくしながら、表現が生み出された動機には根源的な相違があった。だから、林語堂はアメリカ社会が個人主義的独立を重んじるあまり、中国の老年者が享受している幸福から見放されていると、続けて次のように主張するのである。

「アメリカの老人は、自分が多忙で活動的であることを強調したが、それは馬鹿げたくらいに強力な個人主義から直接出たものだと、私は考える。それは彼らのプライドであり、自主独立を愛する心であり、子供たちの厄介になることを恥とする態度である。しかしアメリカ

人はその憲法の中で多くの人権について規定しながら、不思議なことに子供によって養われるという権利を忘れてしまっている。それは奉仕から出た権利と義務なのに。若い頃に子供のために苦勞し、子供が病気の時は幾夜も眠らずに看病し、まだものも言えない子のおむつを洗い、四分の一世紀もかかって子供を育て、立派に生きてゆけるようにしつけた両親が、年をとって子供らに養われ、慕われ、また敬われる権利があることを、否定できる人がいるだろうか。人は子供の時は両親に養育され、次に今度は自分の子を養育し、さらに最後は子供の厄介になるという家庭生活の全体的な仕組みの中にあっても、自己や自尊心を忘れることができないものなのだろうか。中国人が個人主義的独立の意義を理解してこなかったのは、人生の全体的観念が家庭内の相互扶助に基づいているからである。だから人生の終焉に、子供たちに仕えられて生きるということは、何の恥でもない。むしろ親の世話ができる子供を持つことを幸福と見なす。中国では人の生きる目的はこれ以外にはないのだ。」<sup>7</sup>

幼い頃には親からの養育を受け、子供をもうければ大切に育て、次に自らが老いれば自分の子供から面倒を見てもらう、こうした家族構成員間に見られる養育と扶養の相互関係の有無こそが、中国とアメリカとの間に見られる顕著な文化的差異である、と林語堂は指摘する。世代間に行われるフィード・バック型扶養関係の習慣を持たないことが、アメリカの社会に不幸な影を投げかけているのだ、と主張するのである。ここで林語堂が提示する相互扶養関係についての見解は、実に驚くべきことなのだが、後年の費孝通が述べた考えを先取りするものでもあった。費孝通は、1983年に香港で行った「家族構造の変動における老人の扶養問題」と題する講演の中でこう述べた。

「このフィード・バック型の基盤は何であろうか。質朴な農民は『養児防老（老後のために息子を育てる）』の四文字でそれに答える。彼らがこのように先祖代々を伝えていくこと、つまり継承の問題を解決するのは、私を大いに啓発する。人間の一生を幼・壮・老の三つの時期に分けるなら、その中でただ中間の時期のみ、自分の労働によって自活することができ、幼年と老年の二つの時期はすべて、程度はさまざまであるが、他人に養ってもらわねばならない。幼児の養育と老人の扶養は、あらゆる社会が解決せねばならない問題である。中国の伝統社会はフィード・バック方式によってこの問題を解決してきたのである。」<sup>8</sup>

中国社会とアメリカ社会との差異を決定づけたのは、家庭内世代間の相互扶養関係、費孝通の造語でいうなら「社会継替」の有無だ、という見解は同じくしながらも、林語堂と費孝通の二人が「社会継替」そのものに与える評価にはズレがある。林語堂はアメリカ人が享受できない人生の幸福をもたらす習慣であるとしてひたすら称揚するが、費孝通の方はこの相互扶養関

係が中国の伝統的な社会を特徴付ける習慣ではあるが、それは老人の扶養問題の一解決法に過ぎないと指摘するからである。こうしたズレも、やはり先に述べた二人の中国社会と近代社会に対する価値観の相違から導き出されたものと考えべきだ。互いに同じ発見から出発しながら、二人の人生における老いの位置づけは一体どうしてこうも異なり、それぞれにどのような意味を見出そうとしたのか。そうした問題を、二人の言説の系譜を追いながら、以下にもう少し探ってみることにしたい。

## 2. 渡米と中国文化論執筆

1936年秋、上海から横浜、ハワイを経、1919年の留学以来となる渡米を果たした林語堂は、その年12月上海で発行された雑誌に寄せた文章で、アメリカ到着の印象を以下のように中国の読者に伝えている。

「あなた方は中国の文化がもっと合理的、快適、生活にじっくりし、より自由になることを願わないのだろうか。願わないのではないなら、日常生活、日常の事業、社会通念、子供や動物に向きあう態度、個人としてしっかりと自立している点、人や物に接するマナーなどなど、これら全ての面においてアメリカが我々よりも優れていることを承認しなければならない。こういうと本当に自ら氣勢を削ごうとするようなものだ、だがアメリカの普通の出札係、エレベーターガール、すれちがう旅客、警備員や店員、どれをとっても我々の都市にいるモダン人士よりも礼儀を心得ている。上海の電車の切符売りがみせる挙措態度は、孔子さまがご覧になってもし心中怒りを発しゲンコツをお見舞いになるだろう。」<sup>9</sup>

同時代中国の現実に比べてみれば、林語堂はアメリカ社会の方がはるかに合理的かつ快適であることを認めないわけにはいかなかった。それなのに、あるいはそれゆえにというべきかもしれないが、林語堂は中国文人の伝統的生活趣味を、アメリカの人々に向けて称揚しなければならなかった。

当時、上海でエッセイストとしての名声をかちえ、堅実な雑誌編集刊行の手腕を発揮していた林語堂にとって、一家を引き連れての渡米は一大決心を要したであろう。1932年9月の半月刊雑誌『論語』創刊を皮切りに、34年4月に半月刊『人間世』、さらに35年9月には『宇宙風』を相次いで創刊、三誌すべての主編として実績を重ねていた。そうした林語堂に最終的に渡米の決断を下させた要因は、1935年9月にニューヨークで出版された最初の中国文明評論『My Country and My People』が大成功したことだったにちがいない。この著書がアメリカで大好評の内に迎えられたことで、林語堂はアメリカで著述家として身を立てていく確信を得たはず

だ。しかも、渡米に際しては書名に託けて、「国を売り民を売った（売Country売People）」という中傷が国内同業者から浴びせられた、と伝えられる。<sup>10</sup> 渡米に当たっては、国内での批判や揶揄から逃れて、自由な著述に携わることができるという期待も混じっていたかもしれない。

国内で林語堂が受けた批判の中で最も痛烈なものは、おそらく畏友・魯迅（1881-1936）からのものだっただろう。20年代北京で、同じく雑誌『語絲』に拠り、復古思潮への抵抗の立場から出発しながら、周知のように、二人は30年代には互いに非難を応酬するようになる。魯迅の死を悼んだ文章の中で、林語堂は『人間世』が出ると、左派は私の文学的見解を諒としなかったが、私の方も自分の見解を犠牲にしてまでカラスが一声鳴いただけで得意になっている左派におもねる気になれなかったものだから、魯迅は面白くなく、かといって私もどうしようもなかった。」と述べているが、実際彼が打ちだした文学に関わる見解はことあるごとに魯迅からの非難を受けた。「フェアプレイ」提唱に対しては、「フェアプレイ」を論ずるのはまだ早い」（「論『費厄滌頼』應該緩行」もと『莽原』第1号（1926年1月）掲載、のち第一雑文集『墳』に収録）が書かれた。「ユーモア」提唱に対しては、「私は「ユーモア」を好まない。しかもこれは円卓会議を愛する国民にしかできない遊びであって、中国では、意識することさえできないと思っている。」（「論語一年」もと『論語』第25期（1933年9月）に掲載、のち第八雑文集『南腔北調集』に収録）と冷や水を浴びせられた。「小品文」については、「（生き残るべき小品文は）決して『小擺設』ではないし、慰撫や麻痺ではなおさらでない。それが人に与える愉快と休息は、休養であり、労働と戦闘の前の準備である。」（「小品文的危機」もと『現代』第3巻第6期（1933年10月）に掲載、『南腔北調集』に収録）と、手厳しい注文がついた。胡風の手になる評論「林語堂論」（もと『文学』第4巻第1号（1935年1月）、のち第一評論集『芸芸筆談』に収録）は、魯迅を中心とする左派陣営からの批判を集約したものと言える。胡風の批判を要約すれば、林語堂の文学観は西洋の個性至上主義を無批判に踏襲したものに過ぎず、同時代中国の現実社会を直視しようとしていない、ということになる。しかしながら胡風がいうような主義主張こそが、林語堂が「方巾氣（道学者臭）」<sup>11</sup>と呼んで忌避したものであり、「私見」を尊び<sup>12</sup>、「自我」<sup>13</sup>を中心に据える彼の文学観とは全く相容れないものだった。

こうした状況下で、上海で発行されていた英字紙『The China Critic Weekly』の「The Little Critic」欄に連載していた林語堂の文章が、パール・バック（Pearl Buck 1892-1973）の目にとまったのが機縁となり、彼女の慫慂を受けて著述が開始されたのが、『My Country and My People』だった。1934年の十ヶ月を費やして書き上げられた全380余ページに及ぶ大作は、翌年9月にニューヨークで発売、四ヶ月で七刷を重ねるベストセラーになった。<sup>14</sup> 林語堂の英文によるこの第一作は、今日から見れば多くの修正を要するとともに、甚だ冗漫な印象を拭いきれない。しかしながら第二次大戦の終わりまで、中国に関する著作がもっぱらアマチュアのアメリカ人によって書かれ、「近代的」であることがすなわち「西洋的」であって、「西洋的」で

あることがそのまま「重要」とみなす知的風土<sup>15</sup>であったアメリカにおいては、林語堂の著書は極めて新奇な情報を盛り込んだ著作として、一般読者に受けとめられたに違いない。

例えば、スミス (Arthur H. Smith) の『Chinese Characteristics』は、19世紀後半上海で発行されていた英字紙『North-China Daily News』にスミスが寄稿した記事がまとめられ、林語堂の著書よりも40年以上前の1890年に出版、以来現在に至るまでアメリカで版を重ねる中国文明批評の書である。<sup>16</sup> その書の目次は、The Disregard of Accuracy, Intellectual Turbidity, The Absence of Public Spirit, Indifference to Comfort and Convenienceなどなど、19世紀アメリカでは重要な徳目に数えられるものが、中国人には軒並み欠如していることを指摘する一方、中国人が備えているのは保守性、忍耐心、体力、現状への満足など、およそ肯定的には評価できない長が並べられる。スミスは、時間観念をめぐる記述の中で、中国人と英米人とのあいさつ言葉の相違に触れてこう言う。「中国人が日頃よく出会う人物に『食事を済ませましたか (Have you eaten rice?)』と声をかけるのに対し、英米人は『ご機嫌いかが (How do you do?)』とたずねる。することが一方の常態であるのに対し、食べることが他方の常態なのだ。我々英米人にとって第二の属性ともいべき感情、すなわち「時は金なり」からすれば、普通の世界では最後の一瞬まで、時間は活用すべきものだが、中国人は、他の多くの東洋人同様、驚くべきことにそうした感情から免れているのである。」<sup>17</sup> スミスがあいさつ言葉から見出した相違とは、すなわち中国人には近代精神が欠如しているということだ。中国人は、変化のない生活を意味無く続ける、近代精神とは無縁な人間として記述されていたのである。<sup>18</sup>

こうしたアメリカにおける通念に対し、林語堂はどう挑戦したのか。『My Country and My People』は、前半が総論、後半が生活各方面を個別に論じる二部構成をとる。第一部の冒頭、中国文明の歴史の変遷のあらましを述べた後、林語堂が取りかかったのは、スミスの著書と同じタイトル「Chinese Character」と題した叙述であった。中国人の性格的特徴として、林語堂が列挙するのは、(1)穏健 (sanity) (2)素朴 (simplicity) (3)自然への愛 (love of nature) (4)忍耐 (patience) (5)無関心 (indifference) (6)老かい (old roguery) (7)多産 (fecundity) (8)勤勉 (industry) (9)儉約 (frugality) (10)家庭への愛 (love of family life) (11)平和主義 (pacifism) (12)知足 (contentment) (13)ユーモア (humor) (14)保守的 (conservatism) (15)好色 (sensuality) などであった。<sup>19</sup> これらの項目は、スミスが挙げた項目と共通するよう見えながら、実は巧妙に否定的評価が拭い取られている。林語堂はこれらの項目を、「円熟 (mellowness)」として総括する。林語堂が意図したのは、近代的精神によって支えられた進歩や革新とは異なる文化的価値を言語によって表現することであった。それはすなわち平静や忍耐を評価する文化的風土の中で培われてきた老成の美德である、と林語堂は次のように言う。

「これらの諸性質は、『円熟』の一語に要約することができるだろう。これらはいずれも消極

的な性質で、若者特有の活力や情熱というよりは、むしろ中高年者の特徴である平静や忍耐を連想させる。これは、中華文明が進歩と征服ではなく持続力と忍耐力によって打ち立てられた文明であることを示唆する。中国の文明は、人々にいかなる状況下にあっても平常心を失わぬことを可能にした。こうした『貧しきに安んじ、道を楽しむ』人間にとって、進歩と革新を求める情熱は理解することができない。生活の真の意義を知り、過大な望みを追い求めることはしないのがこの古い民族の古い文化である。<sup>20</sup>

平静や忍耐、そこから引き出される円熟や知足といった現実肯定的生活態度は、当然のことながら冒険や改革への情熱ではなく、むしろ日常生活における趣味の洗練という方向に関心を注ぐ。林語堂は、日常生活における趣味・嗜好を限りなく研ぎ澄ますことが、文化的価値を尊重することになるのだ、と主張するのである。

「中国人には、高貴、野心、改革への情熱、公共精神、冒険心、英雄の気概といった西洋人の美德が欠けている。中国人はモンブランに登攀したり、北極を探検したりといったことに対して興味を持つことはない。しかし、平凡な日常の事柄に対しては非常に強い興味を抱くのである。中国人は無限の忍耐力、辛苦をいとわぬ勤勉、義務感、分別ある常識、快活、ユーモア、寛容、穏やかな性格といった、いかなる困難な環境にあっても幸福を見いだすことのできる比類無き才能を持っている。これはまた知足の精神と呼ばれるものである。」<sup>21</sup>

林語堂の論に従えば、変革の気運が乏しい安定した環境にあつては、自らの分を弁えながら長く生きながらえた者にして、はじめて日常生活の機微を感じ取り、繊細な嗜好を追究することができることになる。平穏な生活の中で、感情を激させることなく、日々を暮らす老練な趣味人が味わうことのできる日常的快楽を、林語堂は人々に解き明かすことに傾注する。彼のそうした語り口は、纏足に関する説明にも顕著だ。纏足を奇怪で倒錯的な風習と呼びながらも、女性の自由な活動を阻んできた悪習として非難するよりも、中国人が時間をかけて洗練してきた官能的想像力による人体を用いた最高の造形 (the highest sophistication of the Chinese sensual imagination) であると強調することに方に、むしろ注意が向けられている。ハイヒールの流行とともに纏足は廃絶に追いやられたと言う一方で、林語堂はハイヒールが果たした悪習撲滅の意義を称えるよりも、むしろハイヒールを履いた女性の姿から得られる美感を説くことに急だ。女性の足先に注意する繊細な審美眼が、つとに17世紀の戯曲作家・評論家の李漁(1611-1676?)によって詳述されていた見解であったことを指摘しつつ、纏足について「理想的な生活のディテールに関わる深い洞察が、中国人の才能を特色づけるものなのだ」と結論づけて解説を締めくくっている。『My Country and My People』後半の多く紙幅は、文章製

作から書画，建築に至る文人趣味の代表的営みから始まり，蟹を食べ，茶を飲み，果ては日本人を罵ったり，鉢植えを育てたり，叩頭をすることに至るまで<sup>22</sup>，日常生活のトリヴィアルな嗜みの種々層をめぐって詳述することに当てられた。平穏な日々を繰り返すことを通じて醸し出される円熟の境地，それが何にも増して好ましく思われると次のように述べてこの著書は閉じられている。

「私は春が好きだが，春はあまりに若い。私は夏が好きだが，夏は尊大に過ぎる。だから私は秋が一番好きだ。秋には木々は紅葉し，柔らかな色相，豊かな色彩，そして悲哀と死の予感の気配が漂うからだ。その黄金の豊かさは，春の無邪気でも，夏の力でもなく，年を重ねること（approaching age）の円熟と穏やかな知恵を物語る。」<sup>23</sup>

アメリカ人に向けて中国文化の成り立ちと特徴を解き明かすという壮大な意図から書き下ろされた『My Country and My People』は，アメリカ国内で好評の内に次々と版を重ねた。林語堂の中国文明批評家としての評価は一気に確固たるものになったであろう。ただ，その反響は林語堂が予期するものとは必ずしも一致していなかったけれども，それが却って彼に意外な発見をさせたはずだ。そしてそれは林語堂自身にとっても結果的には幸運であった。「『My Country and My People』が出て，そこで述べたのは中国人の生活に見られる芸術性ばかりではなかったけれども，大部分の読者の注目は飲食や園芸について述べた最後の「The Art of Living」に集まり，多くのアメリカ女性がこの本を生活の指針としてあがめ奉っているという話を聞く」<sup>24</sup>と林語堂自身が語っているように，この本は，アメリカ社会ではこれまで知られていなかったもう一つの時の過ごし方を伝授してくれる実用書として受け取られた。そこで林語堂はすかさず次の企てを着想する。中国人が如何に茶を味わい，如何に山や雲を見，如何に花を育て鳥を飼うか，をもっともっと詳しくアメリカ人に向けて語ることこそが，中国文化の内実をよりよく解き明かす方途なのだ，と彼は確信しただろう。この確信が形を取ったのが，すでに前章で一部引用した『The Importance of Living』であった。

『The Importance of Living』では，袁宏道や李漁をはじめ，林語堂が始めてその価値を見出した張潮『幽夢影』など，明清代の文人たちの言説を大量に引用しつつ，文人趣味について詳細に語ることに精力が注がれている。前著では最終章「The Art of Living」のみに扱われていた内容が，第9章「The Enjoyment of Living」第10章「The Enjoyment of Nature」第11章「The Enjoyment of Travel」第12章「The Enjoyment of Culture」などを主とし，一気に全書14章のほぼ過半にまで拡充された。前書では文人趣味の冒頭に位置づけられていた文学が，ベッドに横たわることや会話の楽しみよりも後回しにされていることも見逃せない。この本では，中国文人の日常の嗜みとそこから得られる快樂が，文人という社会階層について

の解説を抜きにして述べられている。個人の日常的嗜好を詳しく述べることは、個人主義的社会風土を基盤とし、新奇な嗜みの追究に積極的なアメリカの近代家庭においてはじめて受容可能なものであった。かつて林語堂は「私は昔のままの堅苦しくない家庭が欲しい。私が下で仕事をしている時には、上にいる妻子の笑い声が聞こえ、上で仕事をしている時には、下にいる彼らの笑い声が聞こえるような。」と述べ、現実社会の荒波からわが身を庇護する皆たる家庭と、その理想的家庭で嗜まれる料理や蔵書、園芸に対する熱い志向を宣言していた<sup>25</sup>。こうした林語堂の個人的志向は、同時代中国においては左派批評家から恰好の攻撃対象とされてしまったのだが<sup>26</sup>、アメリカに渡って始めて彼は十全に主張することが可能になったのである。

ただ、林語堂流の趣味を実現するには、アメリカ社会で欠けている点の一つがあった。それが老いの尊重である。前節で見たように、林語堂は家庭での楽しみを享受するには、世代間の相互扶養関係の存在維持が不可欠であると主張していた。その関係が維持されている限りにおいて、老境に入った者が子供たちにかしずかれて味わえる品のよい嗜みを明の屠隆の言を引いて説明した後、彼はこう続けた。

「こうした事柄は、中国のプロレタリア派の論客からは『封建的』だと笑われるが、そこには中国の老紳士たちに執着を覚えさせ今の中国はもうだめだと思わせるに足る魅力があるのだ。のぞみ通りに十分に長生きできれば、いつか誰でも年を取る、これが重要な点だ。個人は抽象の世界に生存し、文字通り独立できると考える馬鹿げた個人主義を忘れれば、人生の黄金時代は老年にあり、若年無知の過去にはないという見地に立ち返って、人生のプランを立てるべきであることを認めなくてはならない。」<sup>27</sup>

林語堂にとって、老いとともに繊細な趣味を研ぎ澄ませ、過去の中国の文人たちが体験したと伝える豊かな日常の家庭生活を享受し続けるためには、年長者に対して恭しく「貴庚多少？」と尋ねる習慣として表象される文化的伝統は、アメリカ人の読者に対してですら譲歩できない条件だったのである。

### 3. 比較社会学への道

費孝通は、林語堂とは全く違った道筋を経て、あいさつ言葉から中国の社会とアメリカの社会との差異に気づくようになっていった。1930年代、気鋭の社会人類学徒として研究に従事するようになって以来、彼は一貫して社会科学の中国化のために力を尽くした。中国農村を対象とした実地調査に基づく先駆的な社会人類学の業績が、イギリス留学時にマリノフスキーの指導の下でまとめられた『Peasant Life in China (漢訳名：江村経済)』であり、帰国後の再調

査に基づいて公刊された『生育制度』であることなどは、すでに広く知られているとおりである。専門領域におけるこれらの主著に対し、アメリカの訪問記に代表される彼の紀行随筆はどのような意義を持つものなのだろう。自らを語ることにかけても饒舌な費孝通は、アメリカからの通信に励んだ理由を、「整篇零写」、すなわち経済的理由から少しずつ書きためてはまとめる習慣が産んだものであって、それらは旅行中の個人的な見聞や感想を記した「随感録」に過ぎないものと控えめに語ってはいる。<sup>28</sup> けれども、全体を読めば、それらが単に経済的な理由から書かれた通信に止まらないことは明らかだ。アメリカ社会の成り立ちや産業構造の分析を踏まえて、日常社会的な言動の細部についてまで観察を加えようとしている態度がそれを示す。費孝通にとって、同時代アメリカを観察することは、中国社会の特殊性を認識する手段でもあった。1999年、彼は新しい世紀を迎えるに当たり、自らの研究の歩みを回顧して、亡くなった最初の夫人・王同惠との共同フィールドワークの産物である調査報告書『花藍瑶社会組織』（1936年）を、自分自身の研究の出発点として挙げる。1935年10月から二ヶ月にわたって、広西省象県（現在の広西壮族自治区金秀瑶族自治县）を中心とする花藍瑶族居住区で行われたこの実地調査が、費孝通の深く記憶するところとなったのは、単に新婚の愛妻を失った痛ましい事件のせいだけではあるまい。彼自身も重傷を負い、北京に帰還するまでの間、病床で取りまとめられた報告書に後書きを付すに際し、彼は次のようにこの調査の目的を記している。

「自分が属する文化を研究するにも訓練が必要だ。訓練の方法とは、すなわち自らのものとは異なる文化の構造をできるだけ多く観察することだ。例えば、百年前の中国文化で成長した人は、『孝』という文字が発生したわけが全く分からないから、『孝』が文化の中で果たす本当の働きを理解することもできない。『これに由る』者は『これを知る』者たり得ないのだ。もしもこの時にオーストラリアに行って原住民が年老いた父母を殺して食糧にしているのを見る機会が得られたら、『孝』の意義と方法は当然問題にされ、解答を求められる機会ができるはずだ。だから、中国文化を研究批評する人なら、できるだけ多くの比較の材料を得ていることが望ましいと我々は考える。」<sup>29</sup>

瑶族を対象として進められた調査は、家庭や親族構成から始めて、村落や族団の成り立ちに説き及ぶ報告としてまとめられた。このスタイルは爾後そのまま自身が属する文化・社会に向かう探究に適用される。<sup>30</sup> 中国国内の少数民族や外国のコミュニティに関する知見は、費孝通が同時代中国社会の問題や未来へのヴィジョンを語るに際して、どうしても欠かすわけにはいかないものだったのである。

費孝通が林語堂と異なるのは、中国の伝統的な生活習慣が近代性からは測り得ない長所を持つものであると主張する必要がなかった点である。それゆえ、彼は老いがすべてに優越する自

文化への懐かしさを告白しながらも、中国文化の内部に見られる冷酷さや冷淡さにも気づくことができた。前に引いた米国の老人が若作りに精力を割くことへの違和感を記す一節に続けて、彼は次のような非常に印象的な思い出を書き留めてもいるからだ。

「アメリカ人の新奇を愛し、勇敢にチャレンジする精神を目の当たりにするたび、私は幼年期の気の毒な友達のことを思わずにいられない。彼は我々がよく知っている船頭の息子で、しょっちゅうわが家に来ては我々といっしょに遊び、名を万年といった。どういうわけか、彼にはアメリカ人に似た精神が混じっていた。年をとっても、結婚しようとしなかった。彼にとっては家庭など無用の長物だった。私は当時そのことの意味を理解できず、他人にならって彼のへそ曲がりを買った。実はこの小さな出来事が、彼が既存の秩序を受け入れられない性格であることを、すでに十分に物語っていたのである。彼が私の家に来るときは、いつでも人からは笑いものにされそうなおかしなアイデアを携えてきた。ある時、私は彼に楕円形を描ける道具を考え出したら、きっと大科学者になれると言ったことがあった。彼はそれを聞くと、まるまる半年かけて、私の顔を見ればその事を持ち出して問い、テストを繰り返したが、結局ものにならなかった。もちろん、私も彼を笑いものにした。だが、今思い出すと、万年がアメリカに生まれていたら、人の笑いものになって、ついには異郷で死ぬようなことには決してならなかっただろうと思う。彼の最期は、悲惨だった。彼の父は常々私の祖母に、『こいつは正業につかず、きっと将来俺様に迷惑をかけるだろう』と言っていたが、その言葉通りになった。彼は捕らえられて、何やら分からぬ罪名で、牢に閉じこめられた。牢を出てから、すぐに行方知らずになったのである。わが家に残ったのは祖母の我々に対する戒めの言葉、『悪さをするんじゃない。万年をご覧』だった。万年は生まれる場所と時代を間違っただけだ。彼はきっと心を痛めただろう。彼の一生が幼い子供の戒めに使われるようになってしまったのだから。

伝統を承認することが美德になるのは、やはり実利があるからだ。誰が万年のようになりたいたいと思うだろうか。でも伝統を認めさえすれば、個人としては、それでもう閉鎖経済の範囲内では生きるすべと保障が得られる。社会全体からすれば、それだけ経済を閉じこめる力が増すのである。よく人は、どうして中国では科学が発達しなかったのか、工業が発展しなかったのかと問う。我々の聡明才知が人後に落ちようはずがない。これはニワトリが先か、タマゴが先かの問題に似ている。つまるところ、我々の経済が農業に閉じこめられていたから伝統を重んじ、老人を敬愛することになったのか、それとも伝統を重んじ、老人を敬愛するから、農業が我々がチャンスから遠ざかってしまうことを余儀なくしたのか。私にはこの問いにももちろん答えられないが、一旦この中に入り込んでしまうと、永遠に堂々巡りをするしかなくなってしまうのだ。」<sup>31</sup>

文化からの自立が許容されず敗退していくしかなかった万年のような人物は、おそらく中国には古今を通じて無数に存在したであろう。無数の敗退者に関心を向けている点で、費孝通の精神は敗退者への配慮を忘れることの無かった中国知識人の健全な一面を、確かに受け継いでいるように思われる。しかし、彼は敗退者を産み続けてきた文化・社会を、ここで性急に全否定しようとはしない。むしろ、自立や個人の成功のみを重んじる同時代アメリカの社会に居心地の悪さを表明する。中国の文化は伝統を受け継ぐことに熱心なあまり、変動を容易に許容せず硬直化をきたしやすい。しかしアメリカでは伝統が軽視されるあまり、人々は歴史的な靈感から見放されている、と費孝通は観察する。亡霊の存在に対する確信に象徴される、過去の尊重を失わない中国文化の核心は、とても美しいものであり、「亡霊（鬼）がいる世界で生活できることは幸福だ」<sup>32</sup>とさえ主張するのである。

費孝通と林語堂との間には決定的な相違がある。それは中国伝統社会への対し方に典型的に現れている。林語堂は伝統社会に蓄積されてきた文人趣味に沈潜し、個人的な興趣を研ぎ澄ませようとするが、費孝通は伝統社会を構成する対人関係の性格そのものに深い関心を寄せる。そして中国人の伝統や父母に対して抱いている感情が、「敬愛」と言うよりは「畏敬」と言うのがふさわしいものであることを鋭く見抜くのである。乏しい資源の獲得をめぐる常利害打算がはたらく中国の伝統社会では、自由な感情の流露がそもそも抑制される仕組みになっているのであって、そうした環境においては例えば忘我を前提とする恋愛感情など発生しようがないのだと彼は次のように言いきる。

「大雑把に言って、西洋人は人の喜びを見て自分も喜ぶが、我々の方は、他人の喜びは常に我々自身を不愉快にする。こういうことがある。我々は人が死ぬと声をあげて慟哭できる、もし慟哭しないと影でいろいろ批評される。しかし、久しぶりに再会した夫婦でも、人前では喜びをちっとも表現できない。そんなことをすれば、エロチックで、重々しさに欠け、軽薄だと不評を買う。西洋では、ちょうど逆だ。うれしい時は心ゆくまでそれを表現する。駅で恋人と抱擁接吻してもいい。よく知った人ならそうせよと勧める。だが、悲しいときは、涙をこらえねばならない、人前で大泣きするのは修養が足りないと見なされる。この東西の違いを説明しようとする、また農業社会と工業社会との区別に原因を求めざるを得ない。農業社会では、特に我々のような古い農業国では、機会が乏しく、皆が非常に低い生活水準で暮らしており、限られた資源を求めて競争しているから、他人の得は常に自分の損で、嫉妬が基本的な精神になっている。災いを喜び、人の喜びを願わないのはこうして伝統になった。人は他人の苦難を憐れむけれども、それは実は同情からではなく安全が自覚できた慰藉なのである。他人の成功が自分の社会でのチャンスを増やす社会でこそ、他人の喜びを喜ぶことができる。」<sup>33</sup>

中国の社会が年長者を畏敬し、「孝」を重要な徳目の一つと数えてきたのに対し、アメリカの社会では自主独立が何よりも重要視されてきた、この明らかな相違から「家庭」の社会的意味が二つの文化では大きく異なっていることに費孝通は気づく。「英米では、家庭こそが本当の意味での生活の砦」であるのに対し、中国農村の家庭とは、燃料食糧を賄う経済的な理由から生まれた人間的結びつきに過ぎず、気の合う同士の気の置けない集まりは家の外にあるのが普通である。中国農村では、「薪・米・油・塩のための夫婦は、どうやら同時に水魚のように打ち解けた仲睦まじい夫婦ではあり得ない」こと<sup>34</sup>を発見するのである。

恐らくこの差異の発見をきっかけとして、費孝通は帰国後1947年から翌年にかけて、二つの著作をまとめた。マーガレット・ミード (Margaret Mead) の『The American Character』(1942年)の閲読を契機に、『初訪美国』の改訂を目指して書き下ろされた『美国人的性格』(1947年)と、大学における郷村社会学の講義を元にしてまとめられた『郷土中国』(1948年)である。コミュニティー分析の比較研究だと自己評価する『郷土中国』のあとがきに「この二つは併せ読まれるべきであるが、それはこの本が中国の事実によって郷村社会の特徴を説明しようとするものであって、ミード女史がアメリカの事実に基づいて移民社会の特徴を説明しようとしたのと方法上で相通ずるからである」と述べられる通り、アメリカ社会の印象を述べようとした『美国人的性格』と「土」が命脈をなす中国農村の構造分析を試みた『郷土中国』とは、双方の記述に相互参照を指示するくだりがしばしば見え、相照らし合う立場から叙述が進められている。その中でも、伝統や家庭の価値に関わる記述は、最も鮮やかな対比が構築されている箇所である。

アメリカでは父母は超克されるべき対象であり、アメリカ人の目からすれば過去は常に障碍(原文は「累贅」)に過ぎない。平等 (equal) ではなく公正 (fair) が重視され、競争に打ち勝って、他者を心服させることが何よりも尊重されるアメリカ社会は、正真正銘の科挙社会だと費孝通は主張する。

「アメリカ人が家柄を軽蔑するのは、家柄などというものが存在しないとか、彼らの成功者の多くが家柄に頼らなかつたとかいうのが理由であつたわけではなく、当たり前のように庇護者の恩恵を受けてきた人物を嫉妬する心理に依るところがあつたように思われる。彼らの心の中には、苦勞してやっと母親に褒めてもらえる自分とは違う小さな弟がいる。その弟のように力を費やさずに成功した者は、たとえ成功し、称賛を受け、大きな報酬を得たとしても、成功していない者を心服させることはできない。抛り所がなく、裸一貫から身を起こした者こそが貴重であり、アメリカ式の英雄たり得る。好漢は苦しく貧しい出身でなければならないのだ。」<sup>35</sup>

個人が自己の才覚によってそれぞれが社会に占める位置を争うアメリカ人に対し、「ここに生

まれてここに死ぬ」生き方しか選択できない「長老統治」が支配する中国農村の社会では、すべてが既存の礼節に従って処理され個人の才覚が働く余地がない。伝統社会には、政治は存在しない、あるのは教化だけだと費孝通はいう。

「教化の権力が成人間の関係にまで拡大するには安定した文化が仮定されなければならない。安定した文化伝統が有効性を保証する。我々がもしも個別の問題について個別に対応しなければならぬとしたら、『老いるまで生き、老いるまで学ぶ』ことを余儀なくされる。実生活のいろいろな場面で遭遇する問題は同じではないからだ。文化は生きるためのマニュアル（原文は「生活譜」）で、我々は問題ごとに参照することができる。故にこのような社会では我々が今いうような成人の境目が存在しない。自分より年長であれば誰でも、自分が今ようやく抱えている問題に既に遭っているはずであり、自分にとっての『師』であり得る。三人の人がいれば、自分がどのように問題に対処すべきか教えることができる人が必ずいるのである。こうして年長者は誰でも年下の者に指図できる教化の権力を握るのだ。『出でれば則ち弟なるべし』、年長者に出会えばこの権力に対し恭順であらなければならない。

我々のあいさつ言葉でお互いの年齢を尋ねるのは決して偶然ではなく、そうした礼儀作法は我々の社会では人に対する時の態度が長幼の順に基づいていることを映し出しているのである。長幼の順もまた教化の権力がもたらす効果の一つなのである。」<sup>36</sup>

こうして費孝通は、中国で「貴庚多少？」という挨拶言葉が通行するようになった仕組みを明るみに出す。長老に対する畏敬は、個人が農村社会で自分の地位を確保するためには、従順であるしかないしきたりによるものであって、林語堂が考えたような個人の幸福をより多く、深く享受するための優れた仕組みなどではない、と費孝通は考える。だから文化のあり方そのものが変革を余儀なくされた時には、年長者に対する恭順の意味も失われてしまう。そうなった時、農村社会そのものが変質してしまわざるを得ないことになるが、費孝通は伝統的な農村社会が将来被る変革の事態を、すでに新中国成立前夜に、次のように予測することができていた。

「文化が不安定で、伝統的な手法では目前の問題に十分に対処できなくなった時、教化の権力は必ずそれにつれて縮小し、親子や師弟の関係に縮まり、そして更にごく短い期間に限定されるようになる。社会が移り変わっている過程では、経験を頼りにすることができないからだ。頼りにできるのが個別の状況を超越した原則になると、原則を形成し、応用できるのは年長者とは限らなくなる。このような能力の年齢との関わりは大きくなく、重要なのは智力と専門性、それにいくばくかのチャンスだ。チャンスは、若年者の方が年長者よりも多い。若者は変化を

恐れず、奇を好み、果敢にトライする。変遷過程では、習慣は適応の障碍となり、経験は頑固と落伍に等しい。頑固と落伍は単に嘲りになるばかりか、生存の機会に対する脅威でもある。こうした環境では、子供は幼名で父親を呼びつけても、父親の怒りをかわないばかりか、却ってそれは親愛の表示となり、父親にまだ邪魔者に成らずにすんでいるという慰撫を与える。尊卑が年齢に無く、長幼が意味のない比較になり、顔を合わせても相手の年齢を問わなくなってしまう、——こうした社会は土地との関係（原文は「郷土性」）も疎遠なのである。」<sup>37</sup>

子供が父親を呼ぶとき、父親の幼い頃の呼び名を使う社会の実像を、費孝通は同時代アメリカに見たにちがいない。それは、費孝通自身が生まれ育ってきた中国の農村社会とは大きく異なるものであった。費孝通は、少数民族の親族組織に関する調査以来13年間、自分が身を置いていた社会の仕組みがどのようなものであり、いかなる特徴を持つのか、一貫して関心を持ち続けてきた。38歳の時中国農村社会が変革を実現する方途を思い描くことができたわけだが、この時万年少年の敗残をめぐる記憶が一層生々しく想起されたのではないだろうか。新中国成立前夜、北京の清華大学で行われた「郷村社会学」の講義を発端としてまとめられた『郷村中国』では、中国に存在した無数の万年少年たちを救済する具体的な手だてが発見されたわけではないにもかかわらず、農村社会の変革の必要性と実現可能性がなお極めて楽観的に構想されているように見える。この後、1950年代以降、そうした楽観とは裏腹に、費孝通自身が中国社会との厳しい対峙を余儀なくされていくのである。

#### 4. 自足と超克

以上に見てきたように、林語堂と費孝通の二人は、中国の文化を同時代アメリカの文化に重ね合わせてみたときに、相手の年齢を問わずにはいられない中国の習慣に、二つの社会が形成してきた文化の相違が典型的に現れていると考えた。しかし、そこから開始された二人の省察の道筋は、大きく様相を異にするものであった。林語堂は、自足した人生の頂点にあるものとして老年を意味づけようとした。それに対して費孝通の方は、長老統治を超克して、老年がひたすら保守的意義を主張することがないような、新たな生活空間創成の可能性を追求しようとしていた。

二冊の中国文明論を好評の内にアメリカ社会に送り出すことに成功した林語堂は、その後30年間にわたり、英文を自在に駆使して、時事評論や中国を舞台にした小説などを次々に発表していく。それらの中で今着目したい業績は、『The Importance of Living』を公刊してから10年後の1947年に、ニューヨークで公刊された宋代の文人・蘇軾の評伝『The Gay Genius — The Life and Times of Su Tungpo—』である。これは世界で最初の本格的な蘇軾評伝である

とともに、アメリカ人に向けて書かれた初の中国文人の伝記として、画期的な意義を有する業績であった。そのまえがきの冒頭に、「1936年に、家族とともに米国に渡った時、縮刷版の中国学基本参考文献を精選したものとともに、この詩人の作品集や関連文献の極めてまれな古い版本をも数冊携えてきていたが、そのためには荷物の余裕などは一切顧みなかった。私はそれまで、彼について本を書くか、あるいは彼の詩や散文を何篇か翻訳できたらと思っていたが、たとえそれができなくても、私が外国にいる間、彼に私と一緒にいてほしいと願ったのである。大きな魅力、独創性、誠実な決意をひめた人間、『手に負えない子供』であり、独立不羈の偉大な創造的人物の作品を、自己の書架に置くことは、心の糧になることであった。今私はこの仕事に専心でき幸福である、そしてそれが東坡伝を書く十分な理由なのである。」と述べられている。<sup>38</sup> この言葉からは、林語堂は渡米以前から蘇軾の作品に親しみ、蘇軾にわが身を重ね合わせて、現実に相対していたと想像できる。こうした古典受容のあり方は、古く『孟子』に述べられる「尚友」にぴったりと合致する、中国では常に肯定評価が与えられてきた極めて正統的なものだ。林語堂は、渡米後の生活に安定を得た時期、中国文人の祖型を成したと彼が見る蘇軾の人生に自分自身を投影して、現実への対し方から日常生活上の嗜みに至るまで、自己点検を試みているように見える。従ってこの評伝は、蘇軾のあり方が批判的に捉えられているというよりは、林語堂好みの文人の典型的な一生が叙述されたもの、というのがむしろふさわしい。この書では、蘇軾の履歴や作品の翻訳の合間に、書き手の蘇軾の気質に対する意見が差し挟まれて、林語堂自身の現実世界との望ましい関わり方が表明されている。次の一節も、数多くはないそうした言表の一つである。

「蘇東坡はあまりに複雑な性格、多面的な人物で、容易には理解しがたい。彼は厳格主義者というにはあまりにも優れた思想家であったし、ただの酒飲みというにはあまりにも立派な儒者であった。彼は人生を非常に深く理解し、人生に高い価値を与えていたので、酒色だけに浪費することなどできなかったのだ。彼は独特の健全で神秘的な人生観をもった自然派詩人であり、常に自然に対する深く偽りでない理解を伴っていた。自然や四季、雨や雪、丘や谷と親しく交わって暮らした。自然から癒しの力を受けていながら、歪んだ精神とひねくれた人生観をもつことができる人などどこにもいない、と私は信ずる。」<sup>39</sup>

ここで林語堂が述べている蘇軾によって典型的に体现された人生、すなわち自然を含む外界の事物との関係を慎重に計測しながら、自己の意思や趣味を陶冶し続ける生き方は、そのまま林語堂自身のモットーとするところであっただろう。彼は老いと共に繊細さを増していく個人の生き方を追究するのだが、それは老いの価値にたいする確信に支えられている。言い換えれば、老いへの自足が前提されているのである。

一方の費孝通は、20世紀40年代末から70年代後半にかけての30年間にわたって激しい政治的変動の波に翻弄される。後、1979年に中国社会学研究会の会長として職務に復帰した費孝通は、同年1月の米中国交樹立を受けて、1ヶ月の短期間ではあったが再びアメリカを訪問する。最初の訪米から35年が経過していた。帰国後、費孝通は再び訪問随感録を公刊した。この随感録では、かつては見過ごされていたアメリカ社会に潜む歪み、例えば人種問題や信仰の意味などが俎上にのせられているけれども、主要な注意は家庭から社会基盤に及ぶ機械化や電子化など、科学技術の進展に向けられている。家事に多くの電化製品が導入されて余暇を産み出していること、急速なモータリゼーションの進展に対する驚き、さらに電話網や電子ネットの整備による高速かつ広範囲に及ぶ人と物の交流などなど、従来の中国農村では想像すらできなかった生活空間の拡張に驚きが素直に語られているように見える。<sup>40</sup> アメリカに着いて十日ほど経った頃、朝ホテルからいとも簡単に北京にいる夫人と通話することができたことを身をもって経験した時に感じた、電子技術が新たな人と人の結びつきを開拓する可能性について、次のような熱い期待が記されてもいる。

「受話器を置いて、私の心はすぐには平静にならなかった。この通話によって、とても大きな社会的変化が今まさに始まっていることを、私は身をもって知った。社会学を学んだ人は、人々の集団がある種の基本的な紐帯によって結合しているとよく人に話したがるものだ。人類の最初の集団は血縁による結びつきで、親子関係を中核とする親族体系を構成し、この紐帯によって家庭、家族、氏族、部落などの血縁集団を形成した。社会経済が発展するにつれ、血縁だけに依存して集団生活を組織しているのはますますやりくりがつかなくなり、日々複雑の度を加える社会生活の需要に対応できなくなって、共同生活を営む集団の構成員は親族関係にある者だけではなくになった。少なくとも同じ土地に居住している人は結びついて共同生活を営まざるを得ないから、地縁の結合が次第に突出し、互いに助け合う近所同士から、村落にまで拡大し、たくさんの村落が結合して経済上の融通を行い、お互いの安全保障のためさらに一つになって、国家が形成されたが、現代国家にとっても、領土は依然として重要な基礎の一つであり続けている。過去の人類の社会から見れば、血縁と地縁は、人々が集団を組織する活動を行う際の基本的な紐帯であり続けてきた。

こうしてみると、電子技術を利用して構成された情報伝達のネットワークは、人々に空間的な制限を超える新しい社会的紐帯を提供し、この紐帯を通じて各地に分散した人々を一つの共同の集団活動に参加させられるようになった、ということができないだろうか。」<sup>41</sup>

費孝通は、電子技術に代表される科学技術が創出した新たな紐帯が、長老統治に依存してきた中国社会のあり方を変革するかもしれないと楽観的に予測する。こうした期待は、帰国後、

早速行政的提言の中にうたわれる。1983年に発表された「小城镇 大問題」は、中国農村の改革を推進するためには、小城镇を農村の文化・教育のセンターにする必要があると訴えた文書である。小城镇が農村社会間の情報交換のセンターとしての機能を果たすことができるようになったとき、始めて若い男女は社交の範囲を拡大し、親の命令や仲人の話に従う封建的な強制結婚に反抗し、近親結婚のような悪習を改めることができる、と費孝通は熱く語っていた。<sup>42</sup>新しい情報通信技術が農村の閉鎖的空間を打ち破った時、長幼がさして意味のない比較と見なされるようになる活力ある社会が誕生する、というのは、今日の中国農村の有り様から見れば、あまりに楽観的に過ぎる予測であったと批判されよう。だが「貴庚多少？」が旧弊に墜ちてしまうような社会を夢見ingことを、咎めることはできまい。林語堂のように老いの特権に自足して立ち止まるのではなく、費孝通は古い文化のあり方を超克する術を真剣に模索していたことは確かなのだから。

ここまで見てきたように、20世紀30年代以降、林語堂と費孝通の二人の足取りは、結果としては大きく異なったものになっていったけれども、人の老いを単に進歩から取り残されたものとして無視することがなかった点は共通していた。彼らは老いから中国文化の特徴を見出し、そこからそれぞれに特色ある文明論を展開していたのである。

#### 〈注〉

- 1 Lin Yutang 『The Importance of Living』(1937年, John Day) テキストは、茨城大学附属図書館所蔵の1938年9月発行の第17刷によった。第8章「The Enjoyment of The Home」第5節「On Growing Old Gracefully」, 194頁。漢訳の書名は「生活的芸術」。
- 2 費孝通『『美国与美国人』旧著重刊前言』(1984年1月)『費孝通文集』第9巻, 263頁。以下、費孝通のテキストは、この『費孝通文集』全15巻(1999-2001年, 北京, 群言出版社)による。
- 3 『初訪美国』「老而不死」, 『費孝通文集』第3巻286頁。
- 4 林語堂の英文は“What is your glorious age?”, 越裔による漢訳では、「問他貴庚」とする(『林語堂名著全集』第21巻, 197頁)。以下林語堂の中国語テキストは、主としてこの『林語堂名著全集』全30巻(1994年, 長春, 東北師範大学出版社)による。一方、費孝通の文章では「貴庚多少」と記される。  
「貴庚」は、現代の標準的な中国語の語彙で、「貴姓」と同様に、聞き手に対する敬意を含んだ丁寧表現である。現代の規範的辞書である『現代漢語詞典』(2002年増補本)にも「貴庚」は「敬辞。問人年齢。」と説明されて収録される。だが、一部の辞書には、「貴庚」は人民共和国成立以前の旧用法、とみなす立場を取るものもある。
- 5 Lin ibid.196頁。
- 6 前掲「老而不死」, 287頁。
- 7 Lin ibid.199頁。
- 8 費孝通「家庭結構変動中の老年贍養問題」(『費孝通文集』第9巻)邦訳には、横山廣子訳「家族構造の変動における老人の扶養問題」(『生育制度—中国の家族と社会』1985年3月東京大学出版会,

- 所収)がある。
- 9 「抵美印象」(もと『宇宙風』第30期, 1936年12月, いま『林語堂名著全集』第18巻拾遺集(下) 278頁)。
  - 10 林太乙『林語堂伝』(『林語堂名著全集』附録之一) 第1部第12章。
  - 11 「方巾気研究」(もと1934年4-5月『申報』「自由談」, 『林語堂名著全集』第14巻「披荊集」所収)
  - 12 「論語社同人戒条」(『林語堂名著全集』第17巻拾遺集(上) 所収)
  - 13 「発刊人間世意見書」(もと『論語』第38期1934年4月, 『林語堂名著全集』第17巻拾遺集(上) 所収)
  - 14 林太乙ibid.第12章
  - 15 ポール・A・コーエン『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』(佐藤慎一訳, 1988年6月, 東京, 平凡社) 序章。
  - 16 使用したテキストは, 2001年, Washington, D.C., Ross & Perry, Inc.リプリント版。
  - 17 Smith ibid.Chapter V The Disregard of Time 41頁。
  - 18 林語堂の娘, 林太乙は『My Country and My People』が出版された1935年頃, 一般的なアメリカ人が有してした中国人の印象は, 次のようなものだったと記す。「一般的なアメリカ人にとってよく目にする中国人は, 中華レストランで仕事をしているか, それともクリーニング店で働いているかだった。推理小説や映画から, ピジニングリッシュを話すCharlie Chan と彼のNo. 1 Sonを知った。もちろん, 地球のあちら側には目の細い黄色い顔の中国人がたくさんいることを彼らは知っていた。彼らが中国を想起すると, イメージするのは, 龍, 玉, 生糸, 箸, アヘン, 弁髪, 男, 纏足の女, 狡猾な軍閥, 野蛮な匪賊, キリスト教を信じない農民, 疫病, 貧窮, 危険であった。」林太乙ibid.第12章。
  - 19 『My Country and My People』Chapter Two 「Chinese Character」, 43頁(使用したテキストは山形大学附属図書館所蔵の1938年, New York, Halcyon House Edition)。
  - 20 ibid.44頁。
  - 21 The Chinese Character v Pacifism ibid. 58頁。
  - 22 The Art of Living i The Pleasures of Life ibid. 322-323頁。
  - 23 Epilogue 1 The End of Life ibid. 347-348頁。
  - 24 「関于吾国与吾民」(もと『宇宙風』第49期, 1937年10月, いま『林語堂名著全集』第18巻拾遺集(下) 300頁)。
  - 25 「言志篇」(もと『論語』第42期, 1934年6月, いま沈永宝編『林語堂批評文集』103頁)。
  - 26 前掲の胡風「林語堂論」は, この一節を引いた上で「これが林氏が憧憬する世界であり, 「桃花源」よりもさらに理想的な「幽閑」世界であって, たとえ「千里眼」の持ち主を捜し出して来たとしても, この世中にはわずかな痕跡すら捜し当てることはできない。」と述べ, 林語堂の個人主義を非難していた。
  - 27 『The Importance of Living』第8章「The Enjoyment of The Home」第5節「On Growing Old Gracefully」, 201頁。
  - 28 「『美国与美国人』旧著重刊前言」(1984年1月), 『費孝通文集』第9巻262頁。
  - 29 「花藍瑶社会組織編后記」(1936年6月), 『費孝通文集』第1巻478-479頁。
  - 30 周知のように, 病癒えた費孝通が, 花藍瑶族の次に調査対象地域として選んだのは, 生まれ故郷の江蘇省呉江県下の震澤鎮開弦弓である。調査を実施するに際して, 彼はその意義を, 「私が花藍瑶を研究した際に用いた方法で, 本国の農村の一つを研究してみる。もしもそうして何らかの成果が挙がったら, 我々の方法が違った性質のコミュニティを研究できるものであることを証明するだろ

う。」(『江村通訊』一 這次研究工作的動機和希望1936年7月、『費孝通文集』第1卷370頁)と述べている。

- 31 前掲「老而不死」, 292頁。
- 32 『初訪美国』第11節「鬼的消滅」, 296頁。R.D.Arkush & L.O.Lee編『Land without Ghosts-Chinese Impressions of America from the Mid-Nineteenth Century to the Present』(1989,University of California Press)は, 第4章「だめなアメリカ (Flawed America)」で, 費孝通のこの文章を訳出している。訳出に当たり、「初めは特長に見えたのに次第に何かが足りないように思われるようになった, アメリカにおける普遍的で古い伝統文化の欠如を扱っている」というコメントが付されている。
- 33 『初訪美国』第12節「男女之間」, 303頁。
- 34 「所謂家庭中心説」(1948年2月), 『費孝通文集』第5卷398頁。
- 35 『美国人的性格』第4節「不令人服輸的成功」, 『費孝通文集』第5卷17頁。
- 36 『郷土中国』第11節「長老統治」, 『費孝通文集』第5卷371頁。
- 37 ibid.371-372頁。
- 38 『The Gay Genius』のテキストは, 東京大学所蔵の1947年The John Day Company版による。Preface vii頁。
- 39 ibid. 第11章「Poets,Courtesans,and Monks」165頁。
- 40 R.D.Arkush & L.O.Lee ibid. 第6章「再発見されたアメリカ」には, 費孝通のこの著書からの抄訳がある。編者は、「特に最近の科学技術や経済の発展に, 彼は感銘を受けながらも, アメリカの社会的及び精神的健康に留保を付けることを忘れていない。しかし彼のアメリカ社会非難のいくつかには, 部分的な撤回が伴う。このような落ち着いたためらいは, 彼の若い頃の文章には見られなかった。」と評し, 新中国成立後書き手が味わった長く辛い体験による影響を示唆している。
- 41 『訪美掠影』第13節「一種新的社会紐帶」, 『費孝通文集』第7卷351頁。
- 42 『小城鎮 大問題』, 『費孝通文集』第9卷230-231頁。また大里浩秋ほか訳『江南農村の工業化』(1988年, 東京, 研文出版) 参照。

## **Lin Yutang, Fei Xiaotong and the attitude towards aging**

NISHIGAMI Masaru

Lin Yutang(1895-1976),who was one of modern China's more Westernized intellectuals, and Fei Xiaotong(1910- ), who is China's most eminent anthropologist and sociologist, both are concerned about the differences between American and Chinese civilization. They both found that the East and the West take exactly opposite points of view about aging. But they made very different evaluations of Chinese attitude toward aging. Lin tried to regard old age very highly as the best age in one's life. Fei, on the other hand, pursued a possibility of overcoming patriarchy, that characterize Chinese agricultural society.

I will discuss implicative meanings of aging that is the central point in Lin and Fei's arguments in this paper.